剣を携え夜の見回りをしていたロンクーの耳に不自然な草むらの音が届き、彼は咄嗟に剣の柄に手を掛け音の方角を見た。野生動物も多い山を行軍しているとは言え、明らかに大きな動物が動いた様なその音に警戒したのだが、姿を現した人影を見て警戒を解いたもののぎょっとした。
「な、何だお前、どうした」
「おー、お前か、丁度良いから手当てしてくれ」
「先に質問に答えろ、どうしたその怪我は」
「どうしたもこうしたも、ネズミを始末したんだよ」
生い茂る草を掻き分けて出てきたのはグレゴであったのだが、彼はロンクーが思わず顔を顰める程の風貌をしており、負傷も見受けられたし服も随分と汚れていた。
元はクロムを団長とする単なる自警団であったイーリス軍は今では他国の者も多く在籍する軍となり、ヴァルム帝国軍との争いを繰り広げている最中だ。その状況下で、ヴァルム大陸各地の領主達が帝国に取り入る材料としてイーリス軍の情報を流す為に密偵として加入してくる者も居た。そういう輩をいち早く見付け出し、排除するのも軍師の仕事であるし、内密に処分する仕事をネズミ退治と称して請け負うのは雇われの身であるグレゴやガイアだった。今日は彼にその仕事が回されたらしい。
「俺じゃなくて誰かに杖を使って貰ったらどうだ」
「いやー、内密にって言われてるからなー。俺もあんまり見られてぇ姿じゃねえし。着替えと手当て道具持ってきてくれよ」
「……俺の天幕に来い。野営外れだから今の時間なら人に見られる事もなかろう」
「んー、ありがとよ」
自分の血なのか返り血なのか、ロンクーが持っているランタンの明かりだけでは判断が出来ないけれども、比較的元気な辺り大きな傷は無い様だ。しかしかなり激しい抵抗をされたのか、衣類の損傷はかなりのものだった。その姿のまま野営に戻る事をグレゴは嫌ったらしいが、天幕が密集していない外れの辺りに設置しているし、皆が休む様な時間帯でもあるのでそこまで心配する事もないだろうというロンクーの天幕の場所を覚えていたのか、グレゴも承諾した。
先にグレゴを自分の天幕に連れていき、彼の着替えを取りに行くついでにルフレに事情を説明して見回りを途中で切り上げた事とグレゴの手当ての旨をロンクーが伝えると、ご苦労だった、ゆっくり休めと伝えてくれと言付けられた。そしてこの件は他言無用だと付け加えたルフレは手当て道具一式を寄越してくれたので礼を述べてから辞し、水と着替えを持って自分の天幕へと戻ると、汚れた衣服のままグレゴが座り込んでいた。疲れているのか、俯いて目を閉じていたので話し掛けるのも気が引けたが、服を脱いで貰わねば手当ても出来ないので側に着替えと手当て道具を置いた。

「どうした、痛むか」
「んー？　いやー、ぼーっとしてただけだ」
　出血がそれなりにある様であったので心配したロンクーが声を掛けると、グレゴは何でもないかの様に否定しながら服を脱いだ。そこまで寒くはないとは言え夜に脱いだまま待つのは冷えるから、血でかなり汚れてはいるがロンクーが戻るまで脱がずに待っていたらしい。脱ぎ捨てられた服の血痕は既に乾いていたが所々生乾きで、グレゴがまだ出血している事を物語っていた。
　汲んできた水で体を清めてやりながら傷の状態を確認すると手練れのこの男にしては結構な負傷をしており、密偵を任されるくらいなのだから当然の被害か、と妙な感心をする。綺麗な端切れをグレゴに渡し、口に咥えた事を確認してから消毒用の酒を染み込ませた布で傷口を拭うと、彼の口からくぐもった声がくわえた布越しに聞こえた。寒がり難そうな傷口には馬油を塗り込み蓋をして、ガーゼをあててから包帯を巻いていく。西フェリアに居た頃は手当ての知識など全く無いに等しかったロンクーも、従軍する様になってからはリズやマリアベルなど癒しの杖を振るう者達の手を煩わせない様にと自主的に覚えていき、今ではこうやって他人の手当てを簡単にではあるが出来る様になっていた。自分のものであれ他人のものであれ傷口から見える白い脂はあまり見たいものではなく、すぐに包帯を巻いて視界から消した。
「……珍しいな、お前が戦場以外でここまで負傷するのも」
「予想外に人数増えちまってなー。ま、全部片付けたけど」
「余計な詮索をするつもりは無いが、あまり無理はするなよ」
「んー……」
　どうやらその間者は一人二人ではなかったのか、はたまた外部の仲間と落ち合っていたのか、それはロンクーには分からないのだが、グレゴはそれなりの人数の相手をしたらしい。いくら一対多数の戦い方に慣れている彼であっても苦しい戦いであったのだろう。グレゴの仕事に対して口出しをするつもりはないが釘を刺すと、のろのろと新しい上着を着ながら歯切れも悪く曖昧な相槌を打たれ、ロンクーは眉根を寄せた。
「どうしたさっきから上の空で……っ?!」
「やーっぱ無理だわ、なあ、やろうぜ」
「はあ?!」
　出血し過ぎて頭がふらつくのか、それなら早く休ませた方が、と手当て道具を仕舞っていたロンクーは、しかし不意に体のバランスを大きく崩して強かに背中は元より後頭部も打ってしまった。引き倒されたらしいと理解するより先にグレゴが跨がりながら言った言葉に思わず素っ頓狂な声が出たのだが、彼はお構いなしに体重をかける。
「いやー、酒でも飲んで鎮めようかと思ったけど、お前が良いタイミングで掛かったもんだからよぉ」

「俺のせいかそれは」
「どうせお前も溜まってんだろ、相手してやるよ」
　男という生き物は気が昂れば性的興奮も感じるもので、戦闘中に勃起する事も少なくない。だから戦闘後は酒を飲んだり女を抱いたり、自分で処理する者は多かった。剣の鍛練はするが戦での実戦経験はほぼ無かったロンクーが従軍する様になって初めて経験したその昂りは彼を大いに動揺させたし、あまりそういう性的な話をする相手も居らず戦闘で生じたその高揚をどうして良いか分からなくても余していたのだが、たまたまその頃会話を交わす様になっていたグレゴがからかいながら処理の方法を教えてくれたのだ。……実演付きで。
「お前今怪我人だろう、駄目だ」
「固ぇ事言うなよ」
「傷口が開いたらどうす……っくぅ！」
「硬くすんのはちんこだけで良いぜー？」
「あ、い変わら、ず、下品な事を、言う奴……め……っ」
　しかも処理の仕方だけではなく性交の仕方も実演付きで教えてくれた事に対して、ロンクーは何と言って良いのか分からない。男同士で事に及べるとは知っていたけれども、まさか自分も経験する羽目になるとは思っていなかった。
　ただ、グレゴは見た目に反して、所謂タチ役ではなかった、のである。彼がどういう人生を歩んできたのかロンクーは踏み込んで聞いた事は無いし聞くつもりも無いが、挿入された経験がそこそこあるらしい上に死線を越えた後は女を抱くより男に挿入されたくなるのだそうだ。……全く以てロンクーには理解出来ないのだがグレゴがそう言うのだからそういう男も居るのだろう。
「ちょっ……待、て、やめ……っ」
　遠慮など全くせずズボンの上から手で股間を揉みしだかれ、意思とは反対にそこが硬くなっていくのを感じてこれ以上やられると我慢出来なくなると判断し、止めさせようと試みるも相手は怪我人なので下手に動けない。せめてもの抵抗でロンクーが切れ長の目で睨むとグレゴはぐんと顔を近付けいかにも悪そうな笑みを浮かべながら言った。

「なあ、くれよ、このばっきばきのちんこ、俺の中にぶち込んでめいっぱいザーメンぶちまけてくれ」

　静かな天幕の中、耳をぞろりと侵したその声は微かに上擦っており、快感の箇所を心得ているかの様に刺激された股間の熱がぶるりと腰を痙攣させる。その震えに顔を歪めたロンクーはグレゴの後頭部を乱暴に掴むとそのまま口付けた。
「ん、ふぁ、……んん、……」
　口の中に流れ込む唾液に血の味が混ざっているのは勿論、消毒に使ったアルコールの臭いと共に手当てした傷口からの血の臭いがロンクーの眉間にぎゅっと皺を寄せる。挑発に乗

ってしまった自分が悪いのだが、矢張り怪我人相手に性交を試みるのは、というロンクーの気後れなどお構いなしにグレゴは自分の股を彼の足に擦り付けてきて、どれだけ今発情しているのかを知らせた。
「ぷぁ、あ、ぁはっ……、ぃ……っ」
「……そら見ろ、やっぱり痛いんだろう」
「痛ぇ、より、気持ち良い、にしてくれる、んだろお？」
「ぅく……っ」
お互いのズボン越しでもグレゴのペニスが勃起している事が分かったので頭を掴んでいた手を離して腰を引き寄せて尻を掴むと、グレゴが体を跳ねさせて痛みの声を上げた。筋肉が強張って傷口に響いたらしい。それに対してロンクーが体を離そうとすると、大きな掌で股間を撫で上げられ動きが止まった。先程グレゴが言った様にロンクーも最近処理をしていない為に溜まっており、快感の刺激には敏感になっていた。
「わ、分かった、分かったから、先に服を脱がせてくれ。お前の傷口を広げてしまったら目も当てられん」
「じゃあ俺のも脱がせてくれよ」
「脱がせてやるから寝台に行け。とにかく体に負担を掛けるな」
「お優しいこった」
ロンクーの服は独特で、その装身具とも呼べる多数の留め具がグレゴの傷に当たってまた出血させる事が目に見えており、だから脱ぐと彼は言ったのだが、グレゴは大して気にしていなかったのか肩を竦めてすかした笑みを見せた。その笑みに若干の不満を覚えたものの、もたもたしていては脱がせる前にまた押し倒されかねないのでばら撒いてしまった手当道具の中から馬油の壜を取ってから寝台の枕元に放って上着を脱ぎ、畳む手間も惜しくて投げ捨てると、ズボンを締めている帯に手を掛ける前に寝台の縁に座ったグレゴが解いてきた。
「少しは我慢出来ないのか、いつもはここまでがっつかない癖に」
「がっつくのはお前の方だもんなー」
「あれはお前、が……っ」
普段、余裕が無いのはロンクーの方であり、今日の様にグレゴが急く事は無い。まるで発情した野生動物だと思ったものの、自分も快感の誘惑に負けてグレゴの腰が立たなくなるまで抱いてしまう事も多々あるのであまり強く言えなかった。何より、座ったまま屈んで下帯の上から食まれては言葉を続けられなかった。
「ま、待て、その体勢だと傷口が、……っ」
「わーかいねえ、たったあれだけでこーんなでかくすんだもんなー」
「人の話を聞けっ！」
グレゴの上半身には結構な数の切り傷があり、屈めば当然

傷口が歪んで痛みも生じるだろうしまた出血もしてしまう筈だ。しかしそれでも構う事なくロンクーの下帯を剥ぎ取ったグレゴは、既に硬度を増してもたげた目の前のペニスの鈴口を何の躊躇いもなく吸い上げた。

「うぅ、……っあ、……」

吸い上げた後に舌先で割れ目を強くもなく弱くもない加減で擦られ、腰を引いたものか押し付けたものか分からずロンクーは体を震えさせる事しか出来なくなる。だがそのまま亀頭を咥えられ、わざと卑猥な音を立てながらねぶられると、ついに堪忍袋の緒が切れて傷の具合など知るかと言わんばかりにグレゴの顔を引き剥がして彼の両脇を抱え、強引に立ち上がらせて口を塞いだ。

「んっ、ふ、んぁ」

仕返しをするかの様に音を立て舌を吸い、絡ませると、気分が完全に乗っているのかグレゴの手が下半身に伸び、尚もペニスを扱かれた。しかしそこで膝を折る訳にもいかず、器用には出来ないが口付けたまま彼の帯を遮二無二解く。ズボンを下ろす為に口を離す手間すら取りたくなくて下着ごと手で下ろせる所まで下ろしてから足でずり下ろし、グレゴの腰を支えながらベッドの縁に膝を乗せた。

「んぁ、はふ、随分、リードが、上手くなった、じゃねえの」

「誰かに、ん、鍛えられた、お陰で、なっ……」

「ん、んんぅ、ん……」

口を離さず上手くベッドに座らせ横たえると、グレゴはキスをしながら褒めた。ロンクーは彼に仕込まれるまでは性経験が皆無であったのでからかったのだろうが、それに対して皮肉を言える程度には成長しており、自分で扱けない様にとグレゴの両手を押さえ付けながら大腿部にペニスを擦り付けると彼もねだる様に腰を押し付けてきた。しかしそれでも触らずにいると、焦れたのだろうグレゴは口付けから逃れてロンクーの肩口に思い切り噛み付いた。

「いっ……！　噛むな！」

「お前が焦らすから、だろ、あぁ、畜生、は、早く触ってくれ、おかしくなっちまう」

ガクガクと震える腰を浮かせてペニスを扱く事をねだるグレゴの声は、僅かな余裕すらない様に思える。本当に珍しい事もあるものだと、噛まれた痛みに顔を歪めながら彼の手を解放してから望み通りにペニスを握れば、既に先走りの体液が溢れ出して亀頭を濡らしていた。

「あ、あ、ぁひ、あぁ、あ、いっ……！」

「……傷口が開いたな」

「か、構わねえ、そんなんどうだって良いから、もうちょーっと強く……っああ、はあぁ」

体液を掌で勃起した竿全体に伸ばしながら緩やかに扱くと、中途半端な力であったからかまたねだられ、亀頭の段差を指の腹で捏ね回してやる。そうすると、全身をびくつかせてグ

レゴが悶えた。胸板に巻いた包帯に血が滲み、彼の体温が上がり血流が活発化している事をロンクーに教えてくれていたが、あまり素直には喜べなかった。

以前からだが、グレゴは情事の最中に痛みを快感に変換する事がある。噛み付いたり、乳首を抓り上げたり、遠慮なく奥まで強引に突いたりしても頭を振って善がるのだ。ただ、本当に痛みしか感じていない場合もあるので見定めが難しい。今日はどうやら傷の痛みさえ気持ちが良いらしい。グレゴはその痛みに喘ぎながら、あまり怪我を大きくすると支障が出そうだが、と包帯に滲む血を苦々しく見たロンクーの肩口の歯形を指先で撫でてから爪を立てた。

「お前が善いからと言って、俺まで気持ち良いものだと思うな」

「その割にゃ、ちんこが反応した、じゃねえか」

「……減らず口を叩くのはこの口か？」

「んぁ……」

どうやらこちらも血が滲む程に爪を立てられた様で、グレゴの手を掴んで咎めると、彼は息を切らしながらもにやりと笑った。それが気に食わず唇に指を這わせたら、彼は少しだけ顔を動かして指を食み、噛んだ。それは予想していたので口付けなくて正解だったともう片方の手でペニスの根本を締め上げ、良い声で啼いたグレゴの反応に満足したロンクーは彼の体から離れた。

「うおっ、ぁ、いっ……」

愛撫を止められたグレゴの不服そうな顔を一瞥してから迷わず両足を抱えて持ち上げ、体を曲げられた反動が傷に響いて痛んだのだろう声が聞こえたが、無視してその足を自分の両肩に乗せる。そしてそれなりに間抜けな体勢であるから文句を言われる前に放り投げていた馬油の壜を取り、蓋を開けて指にたっぷりと盛ると、ひくつく孔の襞に指の腹で丁寧に塗り付けた。

「あ、あ、……んん、ぁ……い、いって、い……っあぁぁ、ああ、あ、あっ、はぁっ、あ、い、い……っ」

「……いや、か？　それとも、いい、か？」

「ひぃ、っん！」

内部を傷付けない様に細心の注意を払いながらゆっくりと指を沈めつつ、汗ばんだ内股に鬱血の痕を付けがてら噛んで歯型をつけると痛がって身を捩ったので、内壁のしこりを指の腹で刺激する。柔らかいそこを執拗に擦られて悶えたグレゴの口から拒絶とも享受とも取れる声が漏れ、普段優位に立てないロンクーの背筋がぞわりと戦慄き、口元が自然と歪んだ笑みを作っていた。

下半身を思い切り抱え上げている所為か、半分浮いている上半身を支える為にしっかりとシーツを握っているグレゴの腕や肩に巻いた包帯には随分と血が滲み出ている。情事が終わったらガーゼも包帯も替えてやった方が良いだろう。中断

して交換してやるという考えなど一切無いロンクーは存分に解した孔から指を引き抜き、再度壜から油を掬い取ると、痛いくらいに勃起した自分のペニスに塗った。
「あぁ、く、くれ、早く、」
「急くな、ただでさえ挿れ難い上に俺だって我慢したんだからすぐに出してしまう」
「い、言ったろーが、くれよ、このばっきばきのちんこぶち込んでめいっぱいザーメンぶちまけてくれっ」
「……後で文句を言っても知らんぞ！」
「ひ、あ、――――っ！」
グレゴの下半身を漸く寝台に下ろし、亀頭を孔にあてがって挿入の角度を調整していたのだが、ペニスを掴まれ内部へと挿入しようとするグレゴを制すどころか挑発に負け、舌打ちして吐き捨てる様に怒鳴ると同時にいきり立ったペニスで一気に奥まで突いた。背を大きく弓なりに反らせ、一切抵抗する事なく根本まで飲み込んだグレゴの内部はひどく熱く、またその熱ですっかり液体状になった馬油が滑りを良くしてペニスに内壁の肉が絡んでくるのが良く分かり、本当にすぐに達してしまいそうだ。余裕が無いのはロンクーも同じであったから、突き上げる度にその溶けそうな絡み付きからせり上がってくる強烈な快感が彼の口からも熱を帯びた嬌声を漏らさせていた。
「はあっ、はっ、……っく、……うぅ、」
「あぁぁ、あ、あ、ぁいっ……！」
「お、い、腕に負担、を、掛けるな、剣が、振れなくなる、ぞ」
「そりゃー、困る、なぁっ……」
「っ……」
突き上げに耐えようと力を込めて寝台にしがみつくグレゴの腕が、傷口が広がって痛んだのか宙に浮く。ロンクーはその腕を掴んで包帯に軽く口付けて咎めたのだが、動きを止めてしまった。珍しくグレゴが首に腕を絡めて引き寄せたからだ。全く以てこの男は俺を挑発するのが腹が立つ程巧い、と彼は体の奥で一瞬にして一層大きくなった熱に顔を歪めた。
恋愛感情を抱いている訳では、ない。愛しいと思う事もなければ他の誰かと話している姿を見て悋気を起こすという事も、全く無い。ただ、快感目的で体を委ねられる事を最初は快く思っていなかったのに、今はすっかり甘受してしまっている。こんな風に血が滲む程鎖骨に噛み付きながら突き上げられるのが好きなのだと心得ている程、この男に馴らされてしまった。本当に腹立たしい事に。
「あ、あぁ、も、もっと、っんん！」
「は、ぁ、い……く、で、出る、あぁ逝く……っ」
「あああぁ……っ！」
鼻を侵す血の臭いが頭の中をぐらぐらと揺さぶり、もっと刺激が欲しくてグレゴの胸板に歯型を付けながらペニスを扱

くと締め付けが更に良くなり、耐え切れずに射精した。体内に射精すると後始末が面倒らしく、文句を言われる事もある為に普段は抜いてから射精するのだが、今回はグレゴ本人が中に出せと言ったのだから良いだろう。
　中に出されたグレゴはまだ達しておらず、それでも中に流れ込んできた熱の余韻に浸っているのか、時折体を小さく跳ねさせて荒い息を吐きながら目を閉じている。そして何を考えたか、一旦抜いて扱いてやるか、とペニスを引き抜こうとしたロンクーの首をいきなり掴んできた。
「ぁがっ……な、にをっ……」
「お、すげぇ、硬くなったの分かるなー」
「な……っあ?!」
　そこまで強い力ではないにしても息が出来ない様に巧みに首を絞めてきたグレゴの手首を掴むと、彼は薄笑いを浮かべて腰をグラインドさせた。思わず腰を引きそうになったロンクーは、しかし腰にも絡み付いてきたグレゴの足に退路を阻まれ息苦しさを訴える表情で睨んだのだが、空いた手を掴まれ首に添えられて目を白黒させるしか出来なかった。
「な、にを、」
「絞めてみ？　こう、」
「は、あっ！」
「ぅぐ……っ」
　首に添えられたロンクーの手に重ねたグレゴの手に力が籠められた直後、孔の内部の圧がぐっと掛かり、首を絞められた事によって反応した自分のペニスが射精した直後であるにも関わらず更に膨れ上がった事が分かる。分かるが、何故いきなりグレゴがこんな――言葉は悪いが――変態じみた事を仕掛けてきたのか不可解で、ロンクーは自分の首を絞めている手を無理矢理引き剥がした。
「な、ん、お前は、いきなり何を、」
「いやー、前から知ってたけどよぉ、男って死にそうになるとちんこおっ勃つじゃねぇか。女も首絞めたら締まりが良くなるって聞くし。今日の奴らもおっ勃ててたから、実際どんな感じなんかなーと思ってなー」
　正常な呼吸が出来る様になり、腰の動きも止めて途切れがちな声で意図を尋ねたロンクーに、腰に回した足を下ろしながら涼しい顔でグレゴは言った。戦闘中の高揚で勃起する事は多いが、彼の言う通り瀕死の重症を負った男も子を残そうとするのか勃起する事がある。ロンクーも今まで何人かそういう兵士を見た。が、何も自分達で試そうとしなくても良いだろう。
「やめろ、そういう事は」
「なーんだよ、お前もちんこでかくしたし俺も締まりが良くなっただろー？」
「……」
「善かったんだろ、なあ、俺の首絞めてお前も首絞められて、

苦しかったけど善かったんだろ。俺の首絞めて、締まりが良くなったケツ何度も突いてもう一回俺の中に出してえんだろ？」

「……っ」

力加減を間違えれば命の危険もある行為を容認する訳にもいかずやめろと言ったのに、グレゴは再度ロンクーの喉笛に指をそろりと這わせて軽く押した。それだけでも僅かな苦しさを覚えるのに、何故かロンクーは頭の奥で何かが焼けた様な快感を得、背中を戦慄かせた。この男の、苦しみながら突き上げに善がる姿が見たいと思ってしまった、のだ。俺もすっかり焼きが回ったものだと忌々しく舌打ちしたロンクーは、せめてお互い本気で絞めない様にと微かに残っていた理性でグレゴの片手に指を絡めて押さえ付け、片腕の動きを封じてから腰をぐいと進めた。

「っあ！　は、あ、あっ、……ぐぅっ……」

「あぁ、あ……っ、本当、だな、締まりが格段に良くなる、な……っ！」

「は……っ、っく、ぅぐ、……っ」

「ずっと、こう、されたかった、んだろうっ……？　どうだ、善いんだろう、随分美味そうに俺のを咥え込んでくれている、なっ！」

「――――っ！」

先程グレゴがやった様に、体重を掛けるのではなく喉仏の辺りを押さえながら力任せに奥を突くと、彼は声にならない悲鳴を上げて仰け反った。下半身を見遣れば萎えるどころか硬く勃起したペニスが腹を叩いており、ロンクーの言葉通りグレゴが善がっている事を教えてくれている。しかしやり過ぎれば本当に窒息してしまう危険もあり、手を緩める代わりに口付けて唇を塞いだ。

「んっ、ふ、うぅ、うぐ、ううぅんっ」

「ぁ、ふ、……くっ、ん……っ」

「ぉあ、あっ、いっ、……て、いて、ぁぎぃ……っ！」

「くぁっ……！　お、前、離せ、はな……づぁぁっ！」

突然、グレゴが空いた手をロンクーの背に回して体を引き寄せたのだが、その挿入の摩擦はグレゴの上半身の傷を包帯の上から容赦なく攻めた。その痛みで内部を更に締め付けたと同時に濁った悲鳴を食い縛った歯の間から漏らしたグレゴに慌て、体を離そうとしたロンクーは、しかしグレゴと同様に濁った叫びを上げた。また肩を噛まれたからだ。しかも、容赦ないくらいに強く。

「お前、も、痛ぇのにでかくして、んじゃねえか、あぁ？」

「そのでかいのに突かれて善がって漏らしてるのはどこのどいつだっ！」

自分の中でロンクーのペニスが一層膨らんだ事が分かったのだろう、グレゴが喧嘩腰の口調で挑発してきて、痛に障ったロンクーは首から手を離し先端から蜜を垂らしている彼の

ペニスを乱暴に掴んでわざと淫猥な音を立てながら扱いた。そうすると、まだ一度も達していないグレゴは頭を振る程快感に身悶えた。
「あぁぁっ、そ、それ好き、もっと、あぁ、善いぃ……っ」
「はあっ、あぁ、くそっ、い、逝く、出るっ」
「お、俺も、ああ逝く、逝く、っあああぁぁ！」
「うあぁっ……！」
竿を滅茶苦茶に扱いてどろどろになった亀頭をぎゅうと握ると、背中に爪を立てながら絶頂を迎えたグレゴが白濁した精液を吐き出した。それと同時にロンクーも二度目の絶頂を迎え全てグレゴの中に出し、痙攣する体を何とか離してからペニスを引き抜いて彼の体の上に覆い被さる様に倒れ込んだ。暫くはお互い、荒い息を吐いて動く事が出来なかった。

座ったまま半分寝ているグレゴは文句を言う気力も無いのか、されるがままに包帯を替えて貰っている。性交で無理をしたせいで傷口が大きく開き、汗も多くかいたので余計にガーゼに血が滲んでおり、体を密着させたロンクーの胸板にまでグレゴの血がついていた。再度体を清め、手当をし直し、包帯を巻くロンクーの表情は、気まずいやら申し訳ないやらの色が濃く出ている。傷もその表情の原因の内の一つだが、一番の原因はうっすらと残っているグレゴの首の痕だ。
首を絞めながらの挿入は、確かに快感を増幅させてくれた。グレゴが言った様に締まりが良くなったし、性器も反応した。だが危険である事には変わりなく、下手をすれば殺してしまう。しかもグレゴは一度しか首を絞めてこなかったのに対し、やめろと言ったロンクーが自主的に彼の首を絞めてしまった。胸の底からふつりと湧いた、嗜虐心によって。
「……終わったからもう寝て良いぞ」
「んー……」
腕の包帯をきっちりと結び、首の痕を隠す為にハイネックの服でも着せようかと思ったが、グレゴがあまりにも眠たそうにしているのでそのまま寝かせる事にした。寝台に大きな体を横たえたグレゴはすぐに寝息を立て始め、天幕の主であるロンクーの事など一切構う事なく夢の中の住人となった。
一人ぽつんと起きているロンクーはそんなグレゴの首元まで毛布を掛け、僅かに見える彼の首の痣を指先で撫でてから手当て道具をルフレに返す為に天幕を出た。出る前に小さな鏡で見た自分の首には痕など少しも残っていない事に、この上なく苦い顔をしていた。

バイオレンスに好きして・4　END